

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19720230

研究課題名（和文）

M. モース技術論に基づく技術人類学の構築：「効果的な伝統的行為」概念に注目して

研究課題名（英文）

An Anthropological Study on Technology Based on Marcel Mauss' s Technology

研究代表者

森田 敦郎（MORITA ATSURO）

大阪大学・人間科学研究科・講師

研究者番号：20436596

研究成果の概要（和文）：本研究では、マルセル・モースの技術論の再考に基づく技術の人類学の枠組みを開発し、それに基づいてタイの土着の機械工業についての民族誌的研究を行った。成果の主なもの単著として近々出版されるほか、国際学会などで発表され、当初の目的を十分に果たすことができた。また、本研究の国際的な成果発表は海外の研究者からも注目を集め、科学技術の人類学についての国際的なネットワークが形成されるなど、予想以上の成果を上げることができた。

研究成果の概要（英文）：The project has achieved the proposed goal by developing theoretical framework for anthropology of technology based on insights of Marcel Mauss. Based on this framework principal investigator finished the manuscript of ethnography of indigenous engineering in Thailand, which is going to be published in the subsequent year. In addition to that, the presentations of the research at international conferences and meetings attracted much attention from international audience and led to the formation of a new international network of researchers working on anthropology of science and technology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	690,000	3,890,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：タイ、マルセル・モース、実践、技術人類学、機械技術

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景となったのは、1990年代以降の人類学を取り巻く次のような状況の変化である。

この時代には、グローバル化の進行に伴い、従来の人類学が「伝統社会」と呼んできた文化的に独自で、社会的経済的に一定の自立性を保つ社会を見いだすことがますます困難

になってきた。このことによって、現代生じている経済発展や社会変化に人類学的方法でアプローチすることの重要性が増し、科学技術の人類学をはじめとする新たな分野が登場した。だが、その一方で、新しい研究領域と従来の人類学がどのように関連し、互いにどのような利益を得ることが出来るかは依然として不明瞭な点が残されていた。

このような背景のもとで、本研究は次のような視点から、従来の人類学と新たな分野である科学技術の社会的研究を結びつけることを試みた。第一の着目点は、20世紀の初頭に技術について広範な議論を行ったマルセル・モース (Marcel Mauss) の議論を現在に復活させることである。モースはすでに近代的な機械技術と農業、工芸といった伝統的な技術を包含する技術論の体系を構想していた。第二の着目点は、この視点を現在のグローバル化するエンジニアリングの展開に応用し、同時代的な民族誌を執筆することである。

2. 研究の目的

上で述べた通り、本研究の目的は次の通りである。第一の目的は、マルセル・モースの技術論の再評価をもとに近年の技術史、科学社会学の成果を取り込んで、技術の人類学の理論的な枠組みを構築することである。第二の目的は、このような理論的検討の成果に基づいて、タイにおけるエンジニアリングの発展とそのグローバルな背景についての民族誌を執筆することである。

本研究ではまた、上記の作業の過程で、海外での学会・研究会発表、海外研究機関での滞在などを行い、成果を国際的に発信することも目的としている。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では理論的研究とフィールド調査の二つの方法を用いた。

第一の理論的検討においては、近年英訳されたマルセル・モースの技術論の精読、さらにモースから深い影響を受けたと考えられるマリリン・ストラザーン (Marilyn Strathern) の著作を検討するとともに、これらの研究と近年の科学技術論との関係を考察した。とくに科学技術論の主導的な研究者であるブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) とストラザーンの間には興味深い交流が見られる。ここでは、この三者を中心にして技術を巡る人類学的な関心の展開を考察した。

第二の方法は、タイにおけるフィールド調査である。ここでは次の三つの場所に焦点を当てて、エンジニアリングのグローバルな活動のネットワークを明らかにした。第一の焦点は、申請者が大学院博士課程以来調査を行っているタイ東北地方の工場を中心とした土着の機械工業のネットワークである。分業関係にある複数の工場、原料の輸入業者、顧客である農民などからなるこのネットワークの調査では、技術が東北タイ地域の社会および生態とグローバルなモノと情報の流れをどのように結びつけているのかを検討し

た。第二に焦点を当てたのは、バンコクを中心にしたエンジニア教育、先進国からの技術移転、政府の技術機関といったいわゆる先進的なエンジニアリングの展開である。ここでは高等教育、科学研究における近年のグローバル化が、上記の土着の機械技術とどのような関係にあるのかを検討した。

4. 研究成果

マルセル・モースの技術論を再評価するとともに、現代の事例をとおしてさらなる枠組みの発展を目指すという本研究の計画は、予想以上のペースで達成され、最終年度は主に国際的な成果発表を中心にして追加的な活動を行った。この成果発表は、海外で一定の評価を受け、科学技術の人類学についての国際的なネットワークの形成につながるなど、予想以上の成果を上げることができた。

第一に、本研究の全体的な成果については、『野生のエンジニアリング：タイにおける土着の機械技術の民族誌』というタイトルで著書の執筆を行い、すでに草稿が完成している。この出版に際しては、学術振興会より研究成果公開促進費の助成を受けて、平成 23 年度中に出版することが確定している。

本書では、第一に、モースの技術論をストラザーンらの議論をふまえて再検討し、技術そのものの持つ多様性に焦点を当てて、物質的な実践がいかに社会的な関係を生み出すのかを検討する理論的な枠組みを構築した。さらに、それをふまえてタイにおける土着の機械技術の概要、歴史的背景を明らかにした。この技術は、海外からの組織的な技術移転ではなく、輸入された機械を独学の機械工たちが修理することを通して形成されたインフォーマルなものである。本書では、このような歴史的特徴に焦点を当てて、海外からもたらされた機械というモノがどのように新たな社会関係を生み出したのかを民族誌的に明らかにした。

これと並行して、申請者は上記の事例についての国際発表を Society for Social Studies for Science、大阪大学、コペンハーゲン大学、コペンハーゲン情報技術大学、台湾国立陽明大学などで行ってきた。さらに、申請者は Society for Social Studies of Science にて、デンマークの研究者らとともに科学技術の人類学についての大規模な分科会を組織し、発表者 13 名、コメンテーター 3 名を集めて関連する事例の比較討論を行った。ここで得られた知見の一部は、学会誌『文化人類学』や分担執筆の著書に発表された。また、分科会の発表の一部は、その後国際ジャーナル *East Asian Science, Technology and Society* に特集として採用され、現在執筆中である。

この特集論文執筆にあたっては、日本人

の著者と国際ジャーナル掲載経験のある外国人の著者および協力者が、ワークショップ形式で執筆を行う新しい試みを導入した。このワークショップは、申請者の英語での執筆能力にかなりの進展をもたらしただけでなく、参加した日本人若手研究者にとっても大きな効果を上げることができた。

さらに申請者がコペンハーゲン情報技術大学などで行った本研究の理論的な成果を総括した英文による発表は、デンマークの共同研究者から注目を受け、国際雑誌の特集号の構成論文に採用された。本論文については現在執筆中で、近く査読のプロセスに入る予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①モハーチ・ゲルゲイ、森田敦郎 2011「比較を生きることについて：ポストプラール人類学に向けて」『哲学（三田哲学会）』125：頁数未定 査読有

②森田敦郎 2009「序 アカウンタビリティと目に見える世界の探求」『文化人類学』73(4)：499-509 査読有

③森田敦郎 2009「デザイン、能力、ヒエラルキー：タイ土着の機械技術における人とモノの目に見える秩序」『文化人類学』73(4)：561-586、2009年3月 査読有

[学会発表] (計9件)

①Morita, Atsuro. 2011.3.7. “Skills Development in Thai Informal Manufacturing Sector: Development of Appropriate Technology and the Role of Apprenticeship”. Third Annual Conference of the Academic Network for Development in Asia (ANDA) (at Nagoya University).

②Morita, Atsuro. 2010.12.7. “Rethinking Technics and the Human: An Experimental Reading of Classic Texts on Technology”. Rethinking the Human and the Social (at Josui-kaikan, Tokyo, Japan).

③Morita, Atsuro. 2010.4.16. “Ethnographic Machine: An Experiment in Postplural Anthropology.” Design of Organization and IT workshop (at IT University of Copenhagen).

④Morita Atsuro 2009.11.23. “Machine as Relational Object: emergence of hybrid relations in Thai Indigenous mechanical engineering” Asia-Pacific Science, Technology and Society Network Conference 2009. (at Griffith University, Brisbane, Australia)

⑤Morita Atsuro 2009.10.29. “Diffusive Agency and Materiality in Informal Engineering Practice: The Case of the Engineering Identity in an Informal Sector of Thailand” Annual Conference of Society for Social Studies of Science (at Washington DC)

⑥Morita Atsuro 2009.7.20. “Compelled to Compare: Travelling Machines, Uncertainty and Emergent Relations in Thai Indigenous Engineering”. International Workshop “Traveling Comparisons: Ethnographic Reflection on Science and Technology” (at Osaka University, sponsored by GCOE Project “A Research Base on Conflict Studies in Humanities”)

⑦Morita Atsuro 2009.7.20. “Travelling Comparisons: Ethnographic Reflections on Science and Technology”. Co-authored with Mohacsi Gergely. International Workshop “Traveling Comparisons: Ethnographic Reflection on Science and Technology” (at Osaka University, sponsored by GCOE Project “A Research Base on Conflict Studies in Humanities”)

⑧Morita Atsuro 2009.6.20. “Technological Indigenization and Emergent Relations: Development of Agricultural Machinery in Thailand”. Conference of East Asian Science, Technology and Society: a International Journal (at National Yang Min University, Taipei, Taiwan)

⑨Morita Atsuro 2008.8.23. “Machines, Practices and Collectivity: the Co-Construction of Agricultural Machinery and Social Groups in Thailand.” Joint Conference of Society for Social Studies of Science and European Association of Studies of Science and Technology (at Erasmus University, Rotterdam)

[図書] (計4件)

①森田敦郎(予定)『野生のエンジニアリング：タイにおける土着の機械技術の民族誌』世界思想社(科学研究費公開促進費助成決定済み)

②森田敦郎 2011「民族誌機械：ポストプラールリズムの実験」、春日直樹編『現実批判の人類学』世界思想社(最終原稿提出済み、夏刊行予定)

③森田敦郎 2009「モノをめぐる実践のトポロジー：タイの機械技術から見た「人間のフェティシズム」批判」、田中雅一編『フェティシズム研究1 フェティシズム論の系譜と展望』195-216頁、京都大学学術出版会、2009

年。

④森田敦郎 2008 「タイ：徒弟制とクラフト労働市場の役割」、岡田亜弥・山田宵子・吉田和浩編『「産業スキルディベロプメント：グローバル化と途上国の人材育成」85-100 頁、日本評論社、2008 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 敦郎 (MORITA Atsuro)

大阪大学・人間科学研究科・講師

研究者番号：20436596